

教育機関の皆様へ

“社会を明るくする運動” 作文コンテスト参加のお願い

法務省保護局更生保護振興課

本コンテストは、全国の小・中学生の皆さんに、日常生活での体験を通じて、犯罪や非行のない明るい社会づくりについて考えたことや感じたことを作文にすることで、更生保護に対する理解を深めてもらうことを目的として実施しており、令和8年で34回目を迎えます。

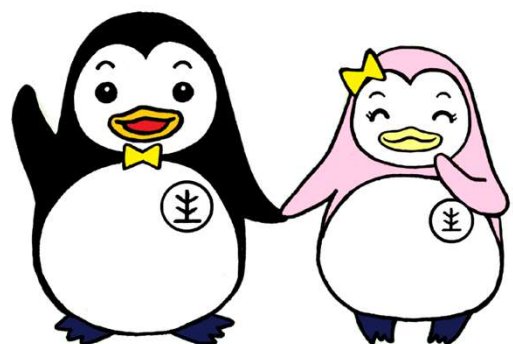
例年、全国から30万点に及ぶ作品が寄せられています。



「更生保護」「犯罪や非行」と聞いて、どこか遠いものを感じるかもしれません。

しかし、後に掲出しております受賞作品をご覧くださいとお分かりいただけるとおり、本テーマに向き合っていたいただいた児童・生徒の皆さんの作文では、自分の住む地域や家庭に目を向け、人とのつながりや他者を思いやる心の大切さが語られています。

「犯罪や非行のない明るい社会づくり」は、皆様の身近なところから始まるものと考えています。



本コンテストの実施につきましては、教育機関の皆様の御協力が不可欠です。一方で、学校としても、本コンテストをどのように扱い、どのように教育に取り入れればよいか、難しい面があるかと思えます。

そうした中、令和7年から、丸善雄松堂株式会社様及び株式会社丸善ジュンク堂書店様のお力添えにより、特別賞（丸善まなびのつながり賞）が新設されました。本賞は、本作文コンテストに参加する学校のうち、特に積極的な取組を行う学校を表彰し、副賞として図書を寄贈しています。

本資料では、特別賞受賞校の取組を御紹介いたします。その取組の視点や工夫を御覧いただき、皆様の学校でも取り入れていただく契機となれば幸いです。

様々なツールを御用意しております

● “社会を明るくする運動”作文コンテスト特設ページ

社会を明るくする運動

社会を明るくする運動とは 更生保護を支える人 更生保護の取組 更生保護ボランティアの皆さんへ



● 小・中学生向けリーフレット



法教育の一環として、保護観察官や保護司による出前授業も可能です。詳細は、最寄りの保護観察所にお問い合わせください。



更生ペンギンのホゴちゃん

令和7年新設!

第75回作文コンテスト特別賞受賞校の取組紹介

学校教育 × “社会を明るくする運動” 作文コンテスト

● 小学校の部 熊谷市立熊谷西小学校（埼玉県）

校長先生が“社会を明るくする運動”について講話を行い、それを踏まえて児童が授業内に作文を書き上げ、優秀作品を校内掲示するなど、児童の意欲を喚起し、更生保護について深く考える機会を提供していただいています。



↓ 長谷部校長先生にお話を伺いました。

● 本コンテストに取り組んだきっかけは？

「学校は社会の縮図である」と言われますが、私自身、学校という社会の中で子供たちがお互いに助け合い、励まし合い、それぞれの良さを認め合う気持ちを醸成することが、実際に子どもたちが社会に出たときに大いに役立つ力であると考えます。そこで、本コンテストに全校で取り組み、学級内での意見交換を通して、互いの考えや思いを共有する時間を設けることで、互いを認め合い、力を合わせて高め合う良い機会になると考えました。

● 実際に取り組んでみて良かったことは？

- 自分の考えや思いを作文に書いたことで、思考力や表現力を高めることができた。
- 全校で取り組んだことで、全教職員の共通理解のもと、犯罪・非行のない地域をつくっていかうという共通意識をもつことができた。
- 作文に書いたことを学級内で意見交換し、互いの考えや思いを共有する時間を設けたことで、子どもたちに様々な考えがあるという認識と互いの考えを認め合う気持ちを醸成することができた。

● 中学校の部 越前町立織田中学校（福井県）

25年にわたり、本コンテストに参加いただいています。また、**保護司とともに効果的な地域活動を継続**されており、生徒にとって保護司が身近な存在になることで、更生保護への関心を育んでいただいています。



↓鳥居校長先生にお話を伺いました。

●本コンテストに取り組んだきっかけは？

本校は、平成16年から継続して作文コンテストに応募しています。越前町では、保護司の皆様をはじめ、関係団体の皆様、地域の皆様、そして町行政が一体となり、犯罪や非行のない明るい社会の実現を目指して、様々な取り組みを積み重ねてこられました。次代を担う小中学生にも主体的に考えてほしいとの思いのもと、越前町役場の方が校長会を訪問され、本コンテストへの応募依頼されたことがきっかけとなっています。

●実際に取り組んでみて良かったことは？

生徒は作文を書くことを通して、自分の言動を見直し「安全で安心な明るい社会を築く」ために、何が大切か、自分はどうのような行動をとると良いかなど自分のこととして向き合っています。また、学級担任は入賞作品を生徒に読み聞かせ、自分たちにできることについて学級全体で話し合う時間を設けています。お互いに意見を交流する中で、新しい気づきや様々な視点に触れ、学びがより深まっています。

●受賞後の校内の反響

生徒に受賞報告をしたところ、たいへん喜んでいました。
生徒の喜びの声を紹介します。（一部抜粋）

- ・ 特別賞を受賞して、織田中学校を誇らしく思ったし、これからの学校生活にもつなげていきたいと思いました。誰かが悩んだり、困っていたりしたら、そっと手をさしのべられるような行動をとって、誰かの支えになりたいです。
- ・ このような立派な賞をいただけたのは、長年にわたり作文コンテストに応募する中で、一人一人が地域のために何ができるかということを考え取り組んできたからだと思います。作文と向き合う中で、思いやりのある行動とは何か、挨拶など身近な行動が社会を明るくすることにつながることに気づき、一人一人が小さなことから取り組んできた証だと思っています。
- ・ すごくうれしいです。これまでの先輩方も同じように社会を明るく運動について真面目に考え取り組んできたことで、受賞できたのだと思います。私はこの作文を書いたとき、課題を難しく考えていました。でも、入賞作品の朗読を聞いたとき、身近なことから変えられることを知りました。ですから、まずは自分にできることから始めていこうと思います。また、他の生徒の作文を読み、考えを深めたいです。

第75回 “社会を明るくする運動” 作文コンテスト 法務大臣賞及び特別賞表彰式

令和7年12月26日（金）、法務省において、第75回“社会を明るくする運動”作文コンテスト法務大臣賞及び特別賞表彰式を行いました。

表彰式には、丸善雄松堂株式会社の矢野正也代表取締役社長及び株式会社丸善ジュンク堂書店の西川仁代表取締役社長にお越しいただき、両社長から各校に対して表彰状と目録が贈られました。



▲特別賞関係者の集合写真



▲矢野社長から表彰を受ける
越前町立織田中学校の鳥居校長



▲西川社長から表彰を受ける
熊谷市立熊谷西小学校の長谷部校長

(保護観察所一覧)

- 御不明点は、お近くの保護観察所までお問合せください
- 皆様の御参加をお待ちしております



法務大臣賞受賞作品（小学生の部）



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第75回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



いちょうの木がくれたつながり



島根県・安来市立社日小学校・六年
足立 崇人

「とっても楽しいよ！」この声を聞いて、僕はとても嬉しい気持ちになりました。

僕が住んでいるのは小さな町。家の近くには神社があって、その真ん中には大きな大きないちょうの木があります。その木を囲むようにして毎年夏休みにはラジオ体操をしています。去年までは町内の小学生だけで集まって、ただただ体を動かすだけでしたが、今年の夏、六年生で班長になった僕は、新しい企画を考えました。それは、子どもだけではなく地域のおじいさんおばあさんを誘って一緒にやることです。

きっかけは、小学校の課外活動で地域のおじいさんやおばあさんからいろいろなことを教わったことでした。今回、「もっと地域の人たちと仲良くなれる活動を自分たちでもできないだろうか」と考えました。そこで、夏休みのラジオ体操に新しい工夫を取り入れてみることにしました。ラジオ体操をした後に集まってくれたおじいさんおばあさんたちと一緒にふれあい活動をすることです。ふれあい活動の内容は、「今日は何の日？」コーナーを作り、子どもたちから説明すること。そしてもうひとつ、子どもたちとおじいさんおばあさんで簡単なレクリエーション活動をすることでした。

ラジオ体操はもともと体を動かして健康を保つことを目的に始まった活動ですが、実際にやってみると、それ以上の効果があったように感じました。僕たちが毎日「今日は何の日」を発表すると、笑ってくれたり、なるほどと感心してくれたり、そこから会話がどんどん広がっていきました。「今日はどんな一日にしようかな。」とみんなが前向きな気持ちになれた

ような気がします。

また、ふれあい活動を続けていくうちに、お年寄りと子どもがお互いの顔や名前を覚えるようになり、自然と会話も増えました。体操の後に「あだち君今日も元気でええね！」「誘ってくれてありがとうね！」と声をかけてもらえるようになりました。参加してくれたお年寄りの口コミで少しずつ参加者も増えて、「毎日楽しみにしちよーけんね。」と感謝の言葉をかけてもらおうと、僕たちもやりがいを感じました。

ラジオ体操期間が終わったある日、参加してくれていたおばあさんに道ですれ違い、「お元気ですか？」と声をかけました。するとそのおばあさんは笑顔で「まあ、ありがとうね。毎日がとっても楽しいよ。」と答えてくれました。その言葉を聞いて僕は、自分たちの活動が少しずつ地域の皆さんを元気に、明るくし始めているのだと気づき、とても嬉しくなりました。

この活動を続けるうちに、僕は「社会を明るくする運動」とはどういうことか考えるようになりました。テレビや新聞では、毎日のように悲しい事件や犯罪のニュースを目にします。そのたびに、犯人はどうしてもっと周りの人に相談をしたり、助けを求めたりできなかったのだろう、と思いました。心が満たされず、こ独を感じることで事件につながってしまうのではないかと考えました。今回の企画を通して、大人も子どもも顔を合わせて声をかけ合い、心を通わせることで気持ちが明るくなり、満たされていくのを感じました。そうして心が元気になると、学校でも仕事でも前向きに頑張れるようになり、社会全体が明るくなっていくのではないかと思います。地域のつながりが強くなることは、犯罪を減らす大きな力にもなるはずです。

僕は来年中学生になりますが、この活動を四年生、五年生に引き継ぎ、自分も参加し続けたいと思います。そして、周りの人の心を少しでも動かし、社会を明るくできるような人間になりたいです。そしていつか、地域の人みんなが「毎日がとっても楽しいよ」と笑顔で言い合えるような社会をつくるのが、僕の目標です。

法務大臣賞受賞作品（中学生の部）



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第75回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

立ち直りに寄り添うとは

愛媛県・西条市立東予東中学校・三年
藤田 一花

私の父が勤めている職場には、年齢や出身、国籍も違う様々な人たちが在籍しています。その中には前科がある人も少なくはないそうです。

三年ほど前、刑務所に服役していたAさんという方が父の職場で働き始めました。作業に慣れるまで時間は掛かったけれど、仕事はとても丁寧で、毎日誰よりも早く出社し、一番遅く帰る生活を続けていたそうです。職場のみんなは真面目で優しいAさんを慕っていました。その頃のAさんに、私も一度会ったことがあります。柔らかな物腰から、温かい人だと感じました。

ようやく仕事にも慣れてきた頃、Aさんは突然仕事を辞め、誰も連絡が取れなくなってしまいました。後から分かったことですが、Aさんが辞職した理由は、同じアパートの住人たちから退去の催促をされ、それに嫌気がさしたからだったそうです。職場のみんながAさんの辞職に戸惑いました。理由を知った私もその話を聞いたとき、やるせない気持ちになったことを今でも鮮明に覚えています。

Aさんの辞職からかなりの時間が経ち、父は再びAさんと連絡が取れるようになりました。今回、私が社会を明るくする運動の作文でAさんのことを書きたいと父に相談すると、父はAさんとの食事に連れて行ってくれました。久しぶりに会ったAさんは以前と変わらず優しく、「作文に書いてくれて嬉しい」と、辞職した当時のことをたくさん話してくれました。

アパートでは、周りからいつも白い目で見られていた。近くを通れば避けられ、聞こえる距離で心無いことを言われた。でもそれは当たり前であって、自分がここに住んで申し訳ないと思っていた。そんな中で職に就け

ることになった。やっと就けた仕事だから頑張りたい。でも人との付き合い方が分からない。不安を抱えながら仕事を続けていたが、職場の人は優しくかった。ここで働けて良かった、仕事が楽しいと思えるようになったが、自分が楽しんでいいのかという思いが常にあった。職場の人たちは温かく接してくれるが、アパートの住人たちは自分をよく思っていない。だから、毎日一番遅くに職場を出て、歩いて時間を潰し、深夜にアパートに帰る。朝早くにアパートを出て、誰よりも早く出社する。とにかくアパートにはいたくなかった。そんな日々の中で、ある日、父と一緒に私と会うことになった。近所の子どもたちからかわれたり、保護者の目や態度が気になったりして、自分からは関わってこなかった。だから、私と初めて会うときは怖かった。でも、そんな風に思うのは相手に失礼だ。相手のことを勝手に決めつけるのは、あのアパートの住人と同じだ。そう思って、私と会うことにしたそう。

Aさんのこれまでのことを聞いて、私は気持ちを言葉にすることができませんでした。私は父の仕事の辛さを知っています。怪我也多く、体力も精神力も必要な仕事です。毎日誰もいない職場に行き、疲れた体で暗闇を歩くAさんは、どんな気持ちでいたのだろうと、アパートの人たちへの怒りも湧きました。しかし、Aさんの最後の言葉を聞いて、私自身もはっとさせられました。それは、会って話をするまでは私もAさんを「怖い」と思い、服役していたことがあるという良くないイメージで見ていたからです。

私たちは、自分の想像や思い込みで人を判断してしまいがちです。その人のことを知ろうともせず、先入観を持って他者と接することは、いつしか差別や偏見につながります。大切なことは、相手の経歴や過去にとらわれず、今自分の目の前にいる人と向き合おうとすることだと思います。私はAさんと実際に話をしてAさんの優しさを知りました。アパートの人たちも、もっと話をしていればまた違う結末があったかもしれません。

人は何度でもやり直せる。けれど、立ち上がるためには場所と周りの手助けが必要です。Aさんは、

「逃げる場所を間違えず、周りの人、自分を大切にしてくれる人を大切に。」

と教えてくれました。私はこれから、誰に対しても進んで話をしようとする

ること、しっかりと言葉にすること、そして言葉を大切にすることを心掛け、周りの人たちに寄り添っていきたいと思います。

父とAさんは、今もたまに食事に行き、他愛もない話をするそうです。誰もが互いに、友人として笑いあったり、楽しく食事ができたりするような、そんな明るい社会になることを願い、私も目の前にいる人と向き合って、大切にしていきたいと思います。

法務省保護局 更生保護振興課

〒100-8977 東京都千代田区霞が関1-1-1

電話 03-3580-4111